平成17年9月6日大水害

あれから10年 >3<

教訓は生かせるか…

森北佳昭氏 基調講演

これからの防災・減災～水害・土砂災害を中心として――

3年前には九州北部豪雨

一昨年 京都の桂川水害、伊豆大島の土砂災害

3年前、平成24年7月の九州北部豪雨でも重大な災害が起きました。矢部川の河口から7・3キロ上流で堤防が50メートルにわたって決壊しました。越水はなく、水位が下がり始めてよかったと思っていたら、しばらくして堤防が決壊したのです。

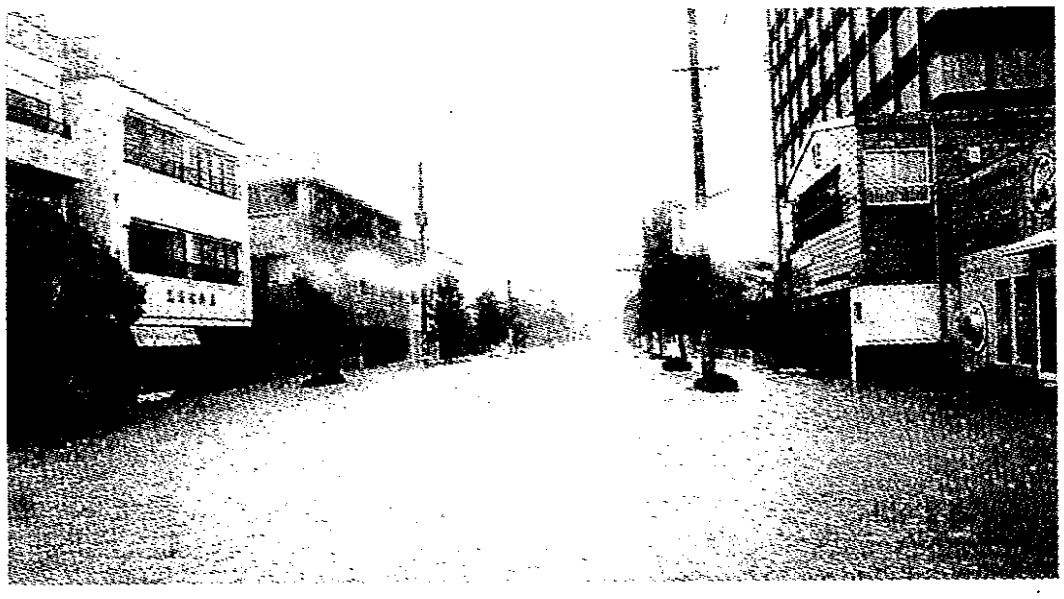
水位が下がり初めても安心してはいけない、最後の最後まで気を抜くことはできないという教訓となりました。原因は、堤防の基盤からの漏水で水の通り道ができ、そこがアリの一穴となって決壊したわけです。

堤防というのは、大昔の小さな堤防を洪水のたびに積み上げていって高くして造ってきました。大昔は最近のように品質を管理して造ることはせず、堤防周りの土砂を積み上げて造っていたため、中がどうなっているか分かりません。

ですので、堤防があれば必ずしも安全ではなく、何かしらの原因で穴が開いて水の逃げ道になることもあり、確実なものではないと認識しておく必要があります。

一昨年の桂川の水害では嵐山（京都）の渡月橋で欄干まで洪水が上がり、旅館や観光施設も浸水しました。しかし本当に危機一髪だったのは渡月橋から10キロ下流の久我橋右岸で、堤防を越えて市街地に水がどんどんあふれていきました。

地元の消防団、自衛隊が土のうを積んで何とか決壊を食い止めました。もし決壊すれば、1万3千戸が浸水し、1・2兆円の被害が発生していたと推定されています。



上流の日吉ダムでは9割の水をため込んで放流量を少なくし、水位を50センチ抑えることができました。ここでも、ダムがなければさらに浸水被害が発生し、土のうも流され堤防が決壊したとみられ、どうなっていたか分かりません。

同年10月の伊豆大島土砂災害では35人が亡くなり、4人の方が行方不明となりました。砂防えん堤（砂防ダム）があった場所では土砂や流木を受け止めて、下流の人家に被害はありませんでしたが、そうでない所に泥流が流れて被害が出ました。

五ケ瀬川左岸の延岡市中心部は商店街も浸水し、都市機能がまひした（平成17年9月6日午後）

防災・減災を考えるシンポジウムから――